

銘尽古態遡及試論（上）

佐々木 紀 一

はじめに

軍記や物語草子に見える名剣の奇特、来歴の伝承が収載される為、刀工を時代別、国別に分類し、茎図、目利、更には代付、位付等の記事をも付した刀剣書、所謂「銘尽」が、国文学研究の対象となつたのは近年の事である（1）。しかしその際、利用される室町時代以前成立の銘尽諸本には、共通記事がある一方、収録刀工、配列が区々で、諸本関係を考察し、その淵源に遡る批判的研究は殆ど放棄されてゐたとして良い。

無論、銘尽の成立が鎌倉後期に遡る事は、伝承的な記載に拠らずとも、江戸時代には存在が知られてゐた、南北朝期写の観智院本（2）の中の起算年からも窺へたのであるが、同本には記事の不連続・重複があるためか、複数の刀剣書を合綴した残欠本との説が成され（3）、観智院本と同じ起算年を持つ記事の有る、室町期の銘尽（正安本・直江本）（4）にも増補改編が予想される為、鎌倉後期の刀剣書の実態は不明確な俣であつた。然るに近時、画期的な研究が成された。

吉原弘通氏は虫食穴の位置と記事内容より、現在の観智院本の錯簡を正し、本文筆写の連続性から、既に一書として成立してゐた底本を書写した本であると結論した。更にそれが三つの構成部分に分かれる事を指摘し、各々近似する構成・本文を持つ伝存銘尽と比較した。その結果、近似する各銘尽と観智院本各部には、それ／＼祖本が想定されるとした（吉原氏論①・②）。次に同氏は『龍造寺文書』に、南北朝時代の観応二年（一三五二）の日付を持つ文書

土代を利用して書写された現在最古の銘尺を発見、その成立事情を考察した上で、刀工の配列が復元観智院本の第三部の構成に近似する事を指摘し、長享本銘尺との関係からも、三銘尺に共通の祖本の存在が想定されたとした⁵⁰。

現存最古の竜造寺本の発見は無論であるが、氏の大きな業績は、観智院本の錯簡を正し、同本の本来の構成を明らかにした事で、竜造寺本との比較により、銘尺の古態本文の構成と、諸本展開の究明、更には鎌倉末期の名剣伝承の実態の究明に大きな手掛かりが与へられたのである。また未だ史料に実在が確認できないが、銘尺の成立に築刑部左衛門入道の関与の大きい可能性を示した事も重要である(吉原氏論^③)。従来、信憑性に問題のあつた室町末期の刀剣書の記事に見えた、刀剣目利の「やなの入道」が龍造寺本の奥書に見える事、また観智院本第一部と共通の構成を持つ宇都宮系本銘尺に、同人と見做せる築刑部左衛門尉入道円阿の説に基づくとする奥書が有る事から、鎌倉時代後期に遡る刀剣書の記載を信じ、その成立に、同人が関与した蓋然性の高い事を示した。

鎌倉後期に於ける複数の刀剣書の成立と、その本文の手掛かりが得られ、以降の銘尺諸本、更には刀剣伝承の成立・展開の考察に道が開けたが、畢竟、現在以上に鎌倉時代後期の銘尺に迫る事は可能であらうか。これまで紹介された刀剣博物館、和鋼博物館他に所蔵される室町時代成立の銘尺の精緻な腑分けも必要だが、鎌倉時代後期の写本、或は例外的に鎌倉末期の内容を保存してある銘尺の出現が何より鶴首される。管見では、明徳三年(一三九二)書写の本奥書を持ち、本文に建武五年(一三三八)の起算年が記される明徳三年本^⑥、更には本稿で検討する近世後期の写本が、目下、吉原氏論^①・^②の復元の妥当性を証し、銘尺古態の究明にも益する有力史料であると思はれる。

一、呆犬齋本銘尺書誌及び構成について

問題の銘尺は、縦三十・四糶、横二十五・四糶。楮紙、紙縫一穴による仮綴の本一冊。水濡・破損が随所にある草臥本で、前後に脱落があり、現在墨付十七丁であるが、冒頭は一丁の裏部分が残る。対して最後の丁は裏部分が脱落

する。販売業者に抛れば仙台藩士子孫に伝来したとのであるが、詳細は不明。外内題・奥書等が一切無い故に、現藏者に因み、呆犬齋本銘尽とする以下、呆犬齋本とする。

本文は近世後期写一筆で、片面十二行。刀工を改行して掲出せず、前の本文に続ける所があり、また後掲の通り、刀工を章題と同じ高さに置く例がある。呆犬齋本の構成をその章題に従ひ挙げるが（「」で示す）、但し必ずしもそれが本文と別に、改行して掲出されてゐる訳ではなく、本文に続く場合があり、又章題を欠く事もある。後者の場合、観智院本を参考に（○）に入れて表す。更に観智院本と対応しない後半部分を欧文字で挙げ該章題を（○）に入れた。また吉原氏論③を参考に、宇都宮本系の貞親本（？）の目次も挙げる。

（呆犬齋本）

- ① (大宝?)
- ② (和銅)
- ③ 「大銅」
- ④ 「一条院御宇」
- ⑤ 「鎮西鍛冶」
- ⑥ 「奥州鍛冶」
- ⑦ 「後鳥羽院御宇」
- ⑧ 「後鳥羽院御宇鍛冶結番」
- ⑨ 「粟田口之鍛冶系図」
- ⑩ 「奈良鍛冶」

（観智院本復元）

第一

- ① 「大宝年中」
- ② 「和銅」
- ③ 「大銅」
- ④ 「一条院御宇」
- ⑤ 「ちんせいかち」
- ⑥ 「奥州かち」
- ⑦ 「後鳥羽院御宇」
- ⑧ 「後鳥羽院御宇鍛冶結番次第」
- ⑨ 「粟田口鍛冶系図」
- ⑩ 「奈良鍛冶」

（貞親本）

- 1 (銘尽)
- 2 (文武天皇大宝年中鍛冶)
- 3 「和銅年中」
- 4 「大銅年中」
- 5 「一条院御宇」
- 6 「白川院御宇」
- 7 「後白川院御宇」
- 8 「後鳥羽院御宇」
- 9 「鍛冶結番」
- 10 「粟田口鍛冶系図」
- 11 「太和国古今」

- ⑪ 「伯耆鍛冶」
- ⑫ 「来之系図」
- ⑬ 「鎌倉鍛冶」
- ⑭ (古今所々時代不同)
- ⑮ 「備前備中籠居ノ鍛冶」

- ⑪ 「伯耆鍛冶」
- ⑫ 「来系図」
- ⑬ 「鎌倉鍛冶」
- ⑭ (古今所々時代不同)
- ⑮ 「備前備中雑鍛冶交名」

- 12 「古今所々時代不同」
- 13 「来系図」
- 14 「近比鎌倉系図」
- 15 「備前国古今不同少々」
- 16 「備中国古今少々時代不同」
- 17 「異説在所不分明物少々」

第二

- ⑯ 「太刀作吉凶日」
- ⑰ 「古今諸国鍛冶銘」
- ⑱ (陸奥河内等鍛冶)

- ⑯ 「太刀刀作善悪日之事」
- ⑰ 「古今諸国鍛冶之銘」
- ⑱ (陸奥河内等鍛冶)
- ⑲ 「銘尽」

- a (行平・光長、猛房説)
- b (金見る様)
- c (諸鍛冶)
- d 「一、又一説(銘尽)」
- e 「一、国永二人」

とあり、①～⑱が正に復元観智院本の構成のそれに相当する事が分かる。貞親本でも配列は両本に近似するが、第一部のみで、本文を見ると(見易さの為、呆犬齋本は刀工を囲んで翻字する)、呆・観両本に遠い事が分かるのである。

二、宇都宮系本及び白杵本との比較

即ち冒頭部を比較すると、

(呆犬齋本①・②)

□のこからすといふ太刀、是を作也、文殊ミち□

にの住人、源氏重代之太刀ひけきり、是を作也、藤

河、彼作之太刀、ミうらの和田三らか重代なり、天王の

御時釵を作、ほうけんおなしく作、八寸五分ハ、かたなゝり、百余

歳存命して、師しやうを□らす、真守、は、きの国

之住人、銘をうつやう、は、きの国大原真守とうつ、平

家之重代ぬけ丸を作

大銅実次盛国

(観智院本①・②)

大宝年中

友光 (略)

天国 平家ちう代のこからすといふ太刀

のつくりなり

文寿 むつの国住人、けんしちう□ひけ□

といふ太刀のつくりなり

藤戸 かの作の太刀、みうらの和田三郎重代也

神息銅和うさの宮寺僧也、へいせいいてんわうの

御つるきをつくる、ほうけんおなし作也

八寸五分 百よさいそんめいす、しやうをしらす

真守 は、きの国住人、めいうつやう、伯耆国

大原真守と打、平家重代のぬけ丸作也

実次 大銅 盛国

(貞親本 2・3・4) (8)

友光 (略)

天国 大和国宇多郡者也、平家重代

小鳥 下云太刀造之、銘ニハ大宝二年

天国ト打ツ、二尺六寸五分、姿ハ長太刀

之柄ヲ切タルカ如シ柄身短シ此太刀ヲ

小鳥ト名付ラレケル事ハ、(桓武天皇に鳥が奉皇の由来省略)

舞種イ
文寿 陸奥国住人、源氏重代之**髭切** 下云

太刀造之、唐人、鬚切ハ満仲之ウタセ

ラレタル也、膝丸ト云太刀同時ニウタセ

ラル、也、口伝在之

藤戸 在所不分明、被造太刀三浦和田

三郎カ許ニ在之云々

○和銅年中 六百余年

(本阿本「から人なり」)

(本阿本「かれこれをつくる」)

元明天皇
神息

宇佐社僧也、平城天皇御劔〔宝動同〕

作、八寸五分刀也、百歳余マテ存命、不知

生死云々、(目利省略)

真守

伯耆国住人、銘ノ打様、伯耆国大原

真守ト打、平家重代之〔拔丸造之〕

コノ拔丸ト申スハ(由来略)

○大銅年中五百年

平城天皇
実次

奥州禅門滅亡之後、相模左近大夫殿

ヨリ被尋出、守殿へ進之処〔法華堂〕

御ツジニ被籠訖、奥州合戦之後、焼ナラ

サル、間、ソリ昔ヨリ高シト、彼作太刀上野殿ニ

在之云々

盛国 彼太刀下野国一門サマノ荒次郎入道相伝ス

と、宇都宮系本よりも、刀工の本文が観智院本と呆犬齋本の間ではほぼ一致する事が分かる。

更に①⑦⑭のみ呆・観両本に近い配列と本文を持つ銘尽がある。一は刀剣博物館蔵『元龜元年刀劍目利書』中「鍛冶目録旧記分」(以下、元龜本)⑨と、白杵市立図書館蔵の何れも近世の写本である⑩。後者の諸写本には表題がない為、請求記号の若い順に挙げ、仮称すると、

白杵甲本(七門刀一十五) 一冊 ⑪

白杵乙本(七門刀一十六) 一冊 ⑫

白杵丙本(七門刀一十七一) 一冊

(本阿本「ししやうをしらす」)

白杵丁本（七門刀―十七―）一冊¹³

で、甲・乙・丙本では、冒頭の「後鳥羽院番鍛冶」の次に、「大宝年中」・「和銅年中」・「一条院御宇」を置き、丁本では、それが16「(有風・方土)」の次に置かれる。その四本と元龜本の中で、呆・観両本、特に呆犬齋本に最も本文が近いのが白杵丙本である。構成は、

A 1「鍛冶銘（後鳥羽院番鍛冶）」、2「大宝年中」、3「和銅年中」、4「一条之院御宇」、5「太和鍛冶」（以上が、甲本A 1から6に近似。丙本では4に甲本の6が含まれる）、C 6「所々時代不同」7「可然物」、8「新作物」、9「粟田口系図」、10「来」、11「備前長船一流」、12「長谷部」、13「越中国住」、14「平安城」、15「越後国（諸国夾雜する）」、16「相模国」、17「大和国」、18「出雲国」、19「丹後国」、20「因幡」、21「肥前国」、22「豊後国」、23「薩摩国」、24「豊前国」、25「駿河二目貫」、26「筑前国」、27「備中国」、28「播磨国」、29「備前国」、30「スリー文字」、31「大一文字」、32「了戒也」、33「助真」、34「鍛冶銘」（以上が乙本のCに対応）で、対応部（呆犬齋本①・②）を挙げると、

（白杵丙本）

大宝年中

友光（略）

1 ㊦

天国² ㊦ 太和国宇多郡の住³ ㊦、平家⁴「重代」小鳥と云太刀、⁵「是」を作、大宝三年

6 「天国」と打、二尺六寸五分⁷ ㊦、すかたハ長刀の⁸「つか」を⁹「切たるかことし」、¹⁰ ㊦

¹¹文寿奥州住人、源氏の重代鬘切ト云太刀¹²「是作」

¹³藤戸彼作之太刀、三浦之和田三郎刀元ニアリ

和銅年中

神息字佐宮ノ寺僧也、平城天皇之御劔¹⁴「是を作」、¹⁵「宝幢同シ作」

八寸五分刀也、百歳¹⁶「余」マテ存命、¹⁷「死生」をしらす¹⁸「」

真守伯耆国住人¹⁹「銘の」打様、伯耆²⁰「国」²¹「」大原真守ト打²²「」、平家

重代²³「ぬけ丸是」を作²⁴「」、²⁵「」

実次²⁶「」²⁷「彼」作太刀ハ奥州之禪門²⁸「滅亡」の後、相模の左近大夫殿より

尋出され²⁹「て守」の殿へ³⁰「遣」、其後³¹「法花黨の」御蔵³²「被籠」

奥州合戦³³「」後焼なを³⁴「し」、³⁵「昔ヨリそり」たかし、³⁶「」上野殿³⁷「是」アリ

とあり¹⁴、校異の記事・文体を見るに、四本中、白杵丙本が呆・観両本に近い事が分かるのである。但し貞親本に見える記事を持ち、呆・観両本間程、近似しない。元龜本は、

(元龜本)

友光(略)

天国^{同御宇}

大宝年中

大和国宇多郡住人也、平家重代小鳥ト

云太刀造之、銘ニハ大宝三年天国ト打ツ、二尺六

寸五分、姿ハ長太刀ノ柄ヲ切リタルカ如シ、柄身短シ、此

太刀ヲ小鳥ト名付ラレケル事ハ、(桓武天皇に鳥が奉呈の由来略)

舞種^イ

文寿

文武天皇
御宇
大宝年中

陸奥国住人^{元来}源氏重代鬚切ト云太刀造之

鬚切ハ満仲之ウタセラレタル也、膝丸ト云太刀同時ニ

ウタセラル、也、口伝在之(下略)

藤戸

同御宇
大宝年中

在所不分明

神息元明天皇
大宝年中
御宇和銅
年中

宇佐宮社僧也、平城天皇御劔宝動此作也

八寸五分刀也、百歳マテ存命スト云、（目利略）

真守元明天皇御
宇和銅年中

伯耆国住人銘ノ打様、伯耆国大原真守ト

打、平家重代之拔丸造之、此拔丸ト申ハ（由来略）

実次平城天皇
御宇大銅
年中

備中国住人一説紀州熊野山住ニ藤原実次ト打

タル太刀刀有り

盛国同御宇

備前国住人、或奥州

とあり、これも貞親本に近く、呆・觀兩本程、近似するとは言ひ難い。

続いて④「一条天皇御宇」〜⑥「奥州鍛冶」部の刀工を挙げれば（同名刀工には国を左に注記、

（呆犬齋本）（觀智院本）（貞親本）（白杵丙本）（元龜本）

1 助包	1 助包	1 安綱	1 安綱	1 安綱
2 安綱	2 安綱	2 助包	2 宗近	2 助包
3 為吉	3 為吉	③ 為吉	3 秦兼平	3 宗近
4 義憲	4 義憲	4 義則	4 正恒 <small>備前</small>	4 秦兼平
5 宗近	5 宗近	5 宗近	5 行平	5 正恒 <small>豊後</small>
6 秦兼平	6 秦兼平	⑥ 秦包平	6 助包	6 延房
7 正恒 <small>備前</small>	7 正恒 <small>備前</small>	⑦ 正恒 <small>備前</small>	7 為吉	7 行平
8 行平 <small>大和</small>	8 信房	⑧ 信房	8 義則	8 高平
9 助平	9 行平	9 行平	9 義包	9 助平
10 友成	10 高平	10 高平	10 信房	10 義則

とあり、8～12で異なるが配列が近似するのが呆・観両本である。本文も、

26 関東	25 藤源次	24 山内滝四良大夫	23 延房	22 正恒 ^{備中}	21 行平 ^{豊後}	20 有成	19 雲同	18 月山	17 行重	16 定秀	15 行忍法師	14 三家伝太	13 正国	12 高平	11 信房										
26 関東	24 藤源次	23 山内滝四良大夫	22 延房	21 正恒 ^{備前}	20 行平		19 雲同	18 月山	17 行重	16 定秀	15 三界伝太 ^{家康}	14 行忍法師	13 正国	12 友成	11 助平										
29 関東	28 助真 ^{江前藤源次}	27 貞国 ^{山内滝四郎大夫}	26 真守	25 助包	24 正恒 ^{備前}	23 行平 ^{豊後}	22 定秀	21 雲同	20 月山	19 家重	18 行仁法師	17 行重	16 有成	15 一家伝太	14 行安	13 正国	12 友成	11 助平							
26 関東	25 助真 ^{江前藤源次}	24 貞国 ^{山内滝四郎大夫}	23 真守	22 助包	21 正恒 ^{備前}	20 行平 ^{豊後}	19 雲同	18 定秀	17 月山	16 行仁	15 行重	14 有成	13 三家伝太	12 正国	11 友成	10 高平	9 助平	8 定秀	7 正国	6 有成	5 行重	4 行仁	3 月山	2 定秀	1 雲同

(呆犬齋本 24・25)

山内滝四良大夫

藤源次 さかミの国治間之住人、三浦之助の重代ゑミくり

といふ太刀是を作、やきはハほそく、やまとたちの風情也

(観智院本)

藤源次 さかミの国、三浦のすけ重代咲栗と

いふ太刀の作、やきはハほそく、やまと太刀に□

(貞親本)

貞国 同国住人、銘ニハ山内滝四郎大夫ト打ッ

助真 相模国住人、江間藤源次、刃細ク大和

太刀之風情ニテサキ少シカレタリ、三浦介

重代咲栗ト云太刀造之

(正安本も近い)

(本阿本)「浪」

(本阿本)「つくる也」

(臼杵丙本)

国弘藤源次、相模国ぬまの住、三浦介咲栗と申太刀、是を作、刃細く、大和太刀の風情にて、少さきかれたり

(元龜本)

貞国同御宇 鎌倉山内滝四郎大夫

助真同御宇 相模国住人、江間藤源次、三浦介重代咲栗ト云太刀此作也

云太刀此作也

(直江本「同相州鍛冶之次第」)

助真 相州治間之藤源次大夫、此作ホソスグヤイハニテ

ヤマト物之風情ナリ、サキスコシカレタリ、三浦之助重代之
エミグリト云太刀此作也

教国 藤源次之子、同三浦之ヨシアキノ太刀ツクリ□

貞国 一セツニワ国広トモ、又国弘共イエリ、同ク□

ニニアリ、鎌倉山内瀧四郎大夫（マヤノ）ト号ス

とあり、呆・観両本の間で、記事は完全に一致しないが、他本に比べて近い事が分かる⁽¹⁵⁾。

此処は呆・観両本が、宇都宮系本他に共通する本文を抄略した本文であらうか。但しその場合は、藤源次・滝四郎大夫の実名を呆・観両本が外したと説明せねばならない。次に宇都宮系本・臼杵丙本・文龜本は前掲の様に文寿を陸奥国住人としながら、唐人ともする⁽¹⁶⁾。事実とすれば銘尽の刀工中、稀有な経歴を持つ例であるが、これは満仲が髭切・膝丸を唐人に鍛へさせたとする『劍卷』⁽¹⁷⁾の記事を挿入した為の仕儀と解される。正安本「陸奥国物」にも、
文寿（ウチノ） みちのくにのちう人、けんしちうたいのひけきりといふ太刀これかつくり
と、陸奥鍛冶とあるが、それが増補以前の本文となる。

これからすると呆・観両本の如き本文に記事を増補したのが、宇都宮系本他の銘尽と見て良いだらう。以上、呆犬齋本は諸本中、観智院本第一部相当部に最も近似すると結論出来る。

また第二部の⑩「太刀作吉凶日」は能阿本系本⁽¹⁸⁾・佐々木本銘尽にも見える。

(呆犬齋本)

一、太刀作吉凶日 吉日、刃刀酉亥辰己也

悪日ハ、子午申戌未也

(観智院本)

太刀刀作善悪日之事

吉日 うし とら とり たつ み
悪日 ね むま さる いぬ う ひつし

(元盛本)

一、太刀刀作吉凶日事

丑 寅 辰 巳 酉 亥 已上六日吉日也

子 卯 午 未 申 戌 已上六日凶日也

又滅日 没日忌也

(佐々木本)

廿八、太刀造吉凶日事

吉日 丑 子 辰 巳 酉 亥 大利日

金剛峯日 等也

忌日 卯 午 未 申 伐殊忌日也、大忌也

丙丁日凶会日 止没滅等日也

とあり、呆犬齋本と観智院本は十二支が完備せず、互ひに出入りがあるが、掲載順に共通性のある事が、それを完備する能阿本系・佐々木本との比較で分かる⁽¹⁹⁾。

次に⑰茎図の構成を、掲載茎図の順に挙げる。無銘の場合、下の小書の刀工を○に入れる。また喜阿弥系本の宮崎本⁽²⁰⁾をも対照する。

(呆犬齋本)

(観智院本)

(宮崎本)

1、(政真)

1、(政真)

1、(政真)

2、長光

2、長光

2、長光

21、20、19、18、17、16、15、14、13、12、11、10、9、8、7、6、5、4、3、
行秀 正恒 守家 介成 信房 正房 吉末 守家 包永 助綱 国吉 国友 国俊 国行 国光 吉光 久国 国末 国安

20、19、18、17、16、15、14、13、12、11、10、9、8、7、6、5、4、3、
行秀 正恒 守家 信房 延房 吉末 守長 包永 助綱 国吉 国友 国俊 国行 国光 吉光 久国 国末 国安

22、21、20、19、18、17、16、15、14、13、12、11、10、9、8、7、6、5、4、3、
行秀 正恒 守家 介成 信房 延房 吉末 守長 包永 国綱 国吉 国友 国俊 国行 国光 吉光 久国 国末 国安 則国

40、 (国治)	39、 滝	38、 (重弘)	37、 国宗	36、 則貞	35、 常遠	34、 豊後国行平	33、 吉房	32、 豊後国不清	31、 宗吉	30、 (天国)	29、 則光	28、 (為吉)	27、 (景光)	26、 (助宗)	25、 (則房)	24、 友成	23、 助重	22、 (助村)	(則常)
40、 くにまさ	39、 (重弘弟子)	38、 (重弘)	37、 国宗	36、 則貞	35、 常遠	34、 豊後国行平	33、 吉房	32、 豊後国末師	31、 (天国)	30、 宗吉	29、 則光	28、 (為吉)	27、 (景光)	26、 (助宗)	25、 (則房)	24、 友成	23、 助重	22、 助重	21、 (則常)
42、 龍	41、 (千手院)	40、 重弘	39、 助真	38、 常遠	37、 豊後国行平	36、 国宗	35、 豊後国末師	34、 天国行	33、 吉房	32、 宗吉	31、 則光	30、 為吉	29、 景光	28、 助宗	27、 助房	26、 友成	25、 助重	24、 助村	23、 則常

41、(某) 43、(中次郎国治)
42、了戒 44、(某)
45、了戒

これを見ると、呆・観両本の茎の配列がほぼ同じ事、宮崎本の後半の順番が、両本の配列に異なる事が分かる。更にこの正和五年を起算年とする茎図を、諸国別分類に合はせて編集した直江本も参照し、本文を比較すると、

(呆犬齋本 17)

古今諸国鍛冶銘

〔茎図〕 備前之政真、正和五年まで八百十五年也、少コスジヒ

かへやすり、太刀三貫斗、刀ハ一貫斗

〔茎図「長光」〕 さりやすり又ハきりめいなり、たかねにてうたす

めぬきあなより上ニうつなり

(観智院本)

古今諸国鍛冶銘

〔茎図〕 備前政真アササネ、正和五ヒ年まで八百五十年也

こすちかゑやすり

〔茎図「長光」〕 大きりやすり又ハほりめいなり、たかねにて

めぬきより上ニうつ、めいハきわふちにうつ

(宮崎本)

〔茎図〕 備前政真、正和五年まで百五十余年なり、小違鑢なり

〔茎図「長光」〕 大切鑢、銘掘字、手金にては打たず、目貫孔の上に打つ、太刀は帯面に打つ

〔直江本「備前国鍛冶之流」〕

〔茎図「長光」〕 大キリヤスリ、ホリメイナリ、ハッキノ上^ニ打モアリ

刀ニワ〇ノ下打モアリ（中略）

〔茎図「政真」〕 正和五年マテ百十五年、コスヂカイヤ□リ

とあり、呆犬齋本と観智院本の本文が近い事が分かるが、前者には代付がある等、相違もあり、寧ろ宮崎本本文に、呆犬齋本よりも観智院本に近い所がある。しかし、

〔呆犬齋本 11・12〕

〔茎図「国吉」〕 こきりやすり、栗田口藤兵衛尉、ひろすくやきは也、はた

〔茎図「助綱」〕 しろし、正和五年まで八百余年也

あはた口、ほうくわうち殿の御代にめしくたさるゝ、鬼

丸を作也、太刀刀共まれ也、大きりやすり、かまくら

のくるまをうちさこんのとかうす、正和五年まで八

百三十年也

〔観智院本〕

〔茎図「国吉」〕 あわた口、藤兵衛、こすちかへやすり、ひろ

やきはすく、あをしろなり、正和五年まで八百□

〔茎図「助綱」〕 あわた口、ほうくわうし殿御代めし下され、おに□

作なり、太刀刀ともにまれ也、大きりやすり、かまく□

のくるまをうち、とうさこんのとかうす、正和五年まで八百

卅年也

(宮崎本)

〔茎図「国吉」〕 粟田口、小切鑢、広直刃肌青く又白し、正和五年まで百余年なり

〔茎図「国綱」〕 大切鑢、正和五年まで百二十年になる

とあるが、粟田口国綱を呆・観両本が「助綱」と誤る等、此処でも両本が近似する事が分かる。

この様に呆犬齋本①～⑮は、現存銘尽中、最も復元観智院本のそれに近いと言つて良い。さうすると、次には両本の関係が問題となる。

三、呆犬齋本の後出性

吉原氏とは別個に、現在の観智院本の錯簡を正した写本が呆犬齋本そのもの、又はその祖本であると見る必要はないだらう。さうすると錯簡発生以前の元観智院本の一部のみ(第一部・第二部)を写し、それ以外の記事を増補したのが呆犬齋本(の祖本)と解する事になるだらうか。

前掲の②の波線相当の本文脱落の例では、呆犬齋本に後出箇所のある事は確かであるし、⑫「来之系図」では、(呆犬齋本)

来之系図 先祖鍛冶自高麗来ル間、来

国とかうす

国吉 国行 国俊 国光 鐘丸

国末 面影 女子 国次 皆共三尺三寸三分也
あはた口くくてんあり

(臼杵丙本)

来高 カウライヨリ来
高麗

国吉 来大郎 孫大郎 国行 六郎 国俊 六郎 国光 「鎌倉へモ下打也」 女子 国次 国長 (下略)

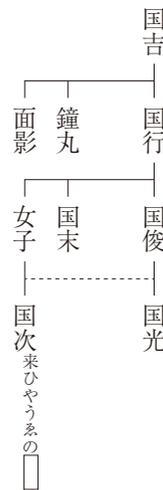
(観智院本第三部14「来系図」)

来系図

粟田口也
国吉 国行 自是来 国永 国俊 国光

(観智院本⑫)

来系図 せんそのかち、かうらいよりきたる
あひた来国とかうす

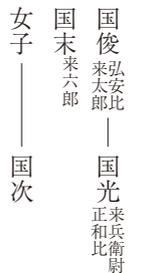


(破線はミセケチ)

(貞親本) ⑪

永徳比
○来系図

国吉 1 2 来之間来国吉 国行
ト号ス
来六郎来之字ハ不打銘ハ目貫穴ノ
下ニ打柄身横鎌モハ毛丸ギ様也
先丸シ2 面影3 蛇丸造之三尺三寸也



国長 号中嶋来菅原国長 ト号 応安比 延文モアリ

国安 越前来童名 千代鶴丸

とある。厳密に言つて此処の刀工の親族関係は不明であるが、鐘丸・面影は名刀の名で、国行作とされる⁽²²⁾。また「三尺三寸也」は、貞親本・本阿本(正安本・直江本同)を見るに、その両刀の寸法の説明である。これは何れも杲犬齋本が本来の系図を崩してゐる例と見て良い。白杵丙本は以降の来流の刀工名の列挙が続くが、対応部分は同様の文章系図に基づくと解釈不可能ではない。しかし前述の脇書が無い事からして、観智院本第三部「来系図」の場合と同じく、杲犬齋本がこれより出たと見る必要は無い。

また⑬「鎌倉鍛冶」では、

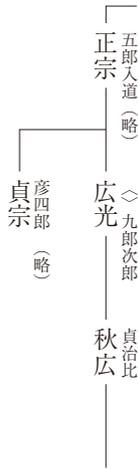
(呆犬齋本)

正宗五良入道、広光九ら次郎、秋広九良三ら、貞宗彦
四郎任左兵衛尉

(観智院本)

正宗 五郎入道 貞宗 彦四郎 左衛門尉にんす

(貞親本)



(本阿本 (貞治のころ))

と、観智院本が持たない、広光・秋広を呆犬齋本が持つ。貞親本に秋広を「貞治比」とし、長享本「近代鎌倉物前後
不同」では、広光に「貞治年ナリ」、秋広に「明徳年中ナリ」とある。本間薫山氏は広光の現存刀が「観応」に遡り、
秋広のそれに「延文・貞治」の年紀のあるものがあり、明徳年紀のある刀は二代であらうとする⁽²³⁾。これからすると、
呆犬齋本には、南北朝期の鍛冶の増補が成されてゐる事になる⁽²⁴⁾。且つそれが宇都宮系本に共通する事から、呆犬
齋本と宇都宮系本には、共に増補記事を持つ祖本が想定されるだらうか。前掲の来系図の国行の寸法の脇書からも、
同様の解釈が一見可能の如くである。

また、⑰「古今諸国鍛冶銘」21で、

(呆犬齋本)

〔茎図「行秀」〕 則常ハ備前のうちもの也、やきはハ、こほし入

なかれやすり、ミねはまろし、正和五年までハ

五十年はかりなり、太刀上ハ三十貫斗也

〔茎図〕

備前之国助村、大ききやすり、乱やきは也

刀ハなしはた、あをし、正和五年まで八百年

はかりなり

〔観智院本〕

〔茎図〕「行秀」

則常ハ、ひんせんのものなり

〔茎図〕

則常

やきは、こほし入、なかれやすり、ミネまるく

正和五年まで八五十年ハかり

〔茎図〕「助重」

ひせん助村、大ききやすり、ミたれやき□

刀ハなしはた、あをし

〔宮崎本〕

〔茎図〕「行秀」

大和の住人

〔茎図〕「則常」

備中者なり、細焼刃入流刃、みねは丸し、正和五年まで五十年なり

〔茎図〕「助村」

備前、大切鑢、乱焼刃、刀は梨子肌青し、正和五年まで百年になる

〔直江本〕「大和国カチノ次第」

〔茎図〕「行秀」

ミネウ四方ナリ、佐々木ノ四郎ウヂ河ワタス時

所持此サク也

〔直江本〕「備前国鍛冶之流」

〔茎図〕「則常」

ヤイハホク、ナカレヤスリ、マルミネツクリ

とある所は、宮崎本でも行秀には目利記事が無い様に、呆・観両本が本来小書の無い行秀茎図の下に、則常のそれを追ひ込み、更に呆犬齋本が、銘の無い則常茎図に続く助村を追ひ込んだと解される。此処は観智院本の形態が古い事

になる。

四、観智院本の後出性

一方で、呆犬齋本が観智院本よりも古態を残す箇所がある。⑭（古今所々時代不同）を見るに、

（呆犬齋本）

（上略） 定俊 兼永 了戒 光包 長光之子任坂本 中次郎

（観智院本）

（上略） 定俊 兼永 中次郎 了戒

光包 長光 弟子 坂本住

（白杵丙本）

（上略） 定俊サツ綾小路 弥五二郎 定俊サツ京五郎入道

光包坂本住 月山奥州 雲同同國

の観智院本の長光の小書は、長光の説明すると意味を成さない。これは「住」を「任」と誤るが、本来、呆犬齋本の如く、長光以下は光包の小書であつたと考へられる。白杵丙本、また喜阿弥系本の加賀本⁽²⁵⁾や佐々木本に、

（加賀本「京鍛冶」） （佐々木本四「京鍛冶事」）

光包備前ノ長光カ
弟子坂本ニ住ス 光包戸津来文和
二死、坂本住云

とあるのも参照出来よう。

これは或いは呆犬齋本の訂正の結果と解する余地があるとしよう。しかし本文でも呆犬齋本が観智院本よりも古態を残す箇所がある。⑰「古今諸国鍛冶銘」の介成を見るに、観智院本には同人が無いが、

(呆犬齋本)

〔茎図「介成」〕 備前のかちの上なり、こすしかへやすり、ミたれ

やきはもあり、はたあをし、なしめなり、刀ハ

まれなり、太刀ハ上か五貫斗也、正和五年

までハ、八十年はかり也

(宮崎本)

〔茎図「介成」〕 備前なり、本は上藹なり、小違鑢なり、乱焼刃もあり、肌者梨子目はだなり、まれなるものな

り、正和五年五百八十年なり

(直江本「大和国カチノ次第」)

〔茎図「介成」〕 スヂカヘヤスリナリ、ミダレヤイバニ、ハダヘシロシ、此作マレナリ

ビゼンニモ同名アリ

と、呆犬齋本と宮崎本・直江本本文が近接する。介成のみ三本の祖本の段階で増補された可能性を考慮するよりも、正和五年の起算年が呆犬齋本と宮崎本に有る事からすると、同記事を観智院本が脱落したと考へられる。

同じ⑰21の鬼神大夫行平で、

(観智院本) 太刀刀、まるミみねお、し、又ミねあり

とあるが、傍線部は意味をなさず、脱落が予想される。本間薫山氏はその前に「庵」が入るかとするが⁽²⁶⁾、呆犬齋本に、

刀にまるミねおほし、又三ミねもあり

と、正に妥当な本文があり、観智院本の目移りの誤脱の可能性をも推察出来る。更に④「一条院御宇」の宗近を見るに、

(呆犬齋本)

宗近三条之小鍛冶といふ

後鳥羽院之御劔う丸といふ太刀是を作、小納言入道

しんさいのこきつねおなしく是を作也

(觀智院本)

宗近 三条のこかちといふ、後とはのゐんの御

つるき、うきまるといふ太刀を作、少納□

入道しんせいのこきつね、おなし作也

(貞親本)

宗近 三条小鍛冶云々、柄身土目ニテ少シ大キ

ラカ也、峯ラ少シ丸クスル、刃ハノ方モ丸シ、後

鳥羽院御劔鶴丸造之、小納言入道

信西所持之小狐同作也 (下略)

(臼杵丙本)

宗近 三条小鍛冶、後鳥羽院之御劔、鶴丸と云太刀是を作、小納言入道信西所持ノ小狐同作也

(直江本「山城之鍛冶之次第」)

〔莖図「宗近」〕三条ノ小カヂト云、六条ノ院一条、院ノ御代正曆年中之物ナリ、(中略) 後鳥羽院ゴトバウイン鶴丸此作ナリ、

小納言入道ナダシシンセイノ子キツネマルトモ作ナリ

(長享本)

宗近 三条小鍛冶、寛和元年〔乙酉〕即位御門ヲ一条ノ院ト申、神武ヨリ六十六代也、(中略) 後鳥羽院御劔鶴

丸造之、少納言入道信西所持之劔同（下略）

とあり、呆・観本文が近いが、観智院本独自の「ウキ丸」は不明である。これは他の銘尽にも見える「鵜丸」が正しく⁽²⁷⁾、呆犬齋本が古態を保つ箇所と解される。

以上から、呆・観両本には共通の祖本が存在すると説明する事になる。⑥「奥州鍛冶」を見るに、

（呆犬齋本）

^a 奥州鍛冶

行重、^b号舞早、^cやきはほそく、^dはたハまさめ也、^e丸ミね
なり、^f中子、^gつちめにてみちかし、^hは、き、ひきし

月山雲國

有成、河内国之住人、後白河院之御劔石切を作也

（観智院本）

^a 奥州かち

行重 ^b舞草とかうす、^cやきはほそく、ⁱすくにて、

^dはたハまさめニて、^eまるミねなり、^fなか

こハつちめに、^gみしかし

月山 雲同

（元龜本）

有成<sup>白河院御宇
延久之比</sup>、河内国住人、後白川院石切造之

行重^{同御宇}、^b号舞種^{イ草}、^a奥州住人^f、柄身土目、^e峯丸シ、^dハ夕

マサメ也

(貞親本) (28)

有成 河内国住人、後白河院石切造之

義平所持之

行重 ^b号舞草、^a奥州住人、^f柄身土目^{ニテ}^g短シ

刃ⁱ直^c細^c、^dハタマサメ^eニテ^e丸峯也、^hハ、キヒキシ

(白杵丙本)

(上略) 行重 ^a奥州住人、^bまうふき刃、^cほぞいすく

有成 河内国住人、後白河院石切是を作也

(正安本「陸奥国物」)

行重 ^{ゆきしげ}一てうのいん、^a奥州のちう、^fつかの身つちめにて、^gみしかし
^{ちやうとく}の比

やきは ⁱすくに^cほそし、^dはたまきめにて

まるむね、^hは、^kきひきし、^b又舞草か事也と

(加賀本「陸奥国鍛冶次第不同」) (29)

行重 ^b舞草、^{太刀刀}ⁱ中心^{十百}^{ニテ}^cホソク、^{ヒケ}^{キリノ}作者也、^{中心}^{ミシカシ}

とあり、記事の配列順と出入りを挙げれば、

呆犬齋本 a—b—c—d—e—f—g—h

観智院本 a—b—c—i—d—e—f—g

元龜本 b—a—f—e—d

貞親本

b | a | f | g | **i** | c | d | e | **h**

臼杵丙本

a | b | i | i | c

正安本

a | f | g | **i** | c | d | e | **h** | b

加賀本

b | f | c | g

と、此処でも目利部分が呆・観両本で共通するのだが、hとiがそれぞれ独自記事である。然るに宇都宮系本・正安本が両記事を持つ。先に宇都宮系本文が呆・観両本に増補した箇所を見たが、此処は呆・観両本の祖本の本文を、宇都宮系本・正安本が継承し、呆・観両本にはそれぞれ脱落があると解するのが合理的であると見るものである。

また一方で、河内鍛冶の有成が、呆犬齋本と宇都宮系本ではこの位置にある。有成は一条院の鍛冶（明徳三年本・佐々木本）とされるから、呆犬齋本の構成上、例外的記事で、観智院本よりも後出記事である可能性も考慮されるが、注目すべきは、宇都宮系本・正安本の行重記事に、呆・観両本それぞれにのみ見える目利記事のある事である（二重線部・波線部）。先に呆犬齋本と宇都宮系本の祖本に、観智院本に無い増補箇所があったが、此処では呆・観両本を遡る祖本の本文を、正安本が保持してゐると見られる。

結論を言へば呆犬齋本は、直接、錯簡以前の観智院本を写したのではなく、同系統の伝本より出たもので、その価値は、正に吉原氏の復元が正しい事を証する事にあるが、更に一部ではあるが観智院本よりも古態を残す所があると指摘出来る。且つ観智院本祖本の構成・本文の批判検討を可能にする事にもある。即ち正に前述の⑥の有成は、時代的に不具合である為、観智院本が除いた可能性が考慮されるのである。同様、④「一条院御宇」では、

（観智院本）

正恒 備前国住人、なかこすりかゑやすり

なかこさき、ふつきりなり、あしか、の

又太良忠綱しよちの太刀なり

(呆犬齋本)

正恒 備前之国之住人、中子すちかへやすり也、中子のさき、ふつときれなり、あしの又大良忠綱もつ、つな
きりを作

(臼杵丙本)

正恒 備前国、すちかひやすり、中こさき、ふつきれなり

(本阿本「一条院御宇」)

正恒 まさのね 備前国住人、つかの身すちかひやすりにて

【正恒】にたり つかの身なく、さきふつきりなり、足利あしかの

又大郎忠綱たつなしよちのつなきり、これをつくる也

正恒のほんめい、(下略)

(貞親本)

正恒 備前国住人、柄身細ク長シ切り鏝ノチト

スチカウ也、峯モハモ四方也、銘ハ目貫穴ノ下ニ

打ツ、佐々木四郎高綱所持之太刀綱切

造之、足利又四郎忠綱イ

(元亀本・明治三十三年本傍線なし)

とあり、観智院本第三部「剣作鍛冶前後不同」の正恒にも「足利又太郎細切丸」とあるのだが、「綱切」が呆犬齋本祖本の増補か、観智院本他が歴史的に不適当な記事⁽³¹⁾を削除したか検討が必要になるのである。

- (1) 鈴木雄一氏「重代の太刀―「銘尽」の説話世界を中心に」(『文学史研究』三十五、平成六年十二月)、鈴木彰氏「平家物語の展開と中世社会」第三部第一編の諸論(平成十八年二月)・渡瀬淳子「室町の知的基盤と言説形成」第二部二「剣巻」の成立背景―熱田神話の再検討と刀剣伝書の世界(平成二十八年十月)
- (2) 本稿では吉原弘道氏「重要文化財「銘尽(観智院本)」の復元とその性格(一)」「刀剣美術」七〇四、平成二十七年九月、以下、吉原氏論①、「同(二)」「同」七〇五、同十月、以下、吉原氏論②の影印による。
- (3) 三矢宮松氏「観智院本銘尽釈文」(昭和十四年七月)
- (4) 何れも刀剣博物館蔵。正安本については、間宮光治氏「銘尽正安本と観智院本銘尽との比較」(『鎌倉鍛冶 藻塩草』所収)、直江本については、吉原弘道氏「平安室町時代における刀鍛冶の基礎的研究―中世刀剣書を中心とした刀工一覽(稿)―」(令和五年二月、以下、吉原氏稿とする)の「直江本銘尽解題」参照。
- (5) 「銘尽(龍造寺本)」から見える中世刀剣書の成立とその受容―申状土代の裏に書写された現存最古の刀剣書―(『古文书研究』八十四、平成二十九年十二月、以下、吉原氏論③)。猶、長享本は、国会図書館蔵新写本(電子公開)による。
- (6) 拙稿「源氏重代太刀伝承二、三」(『米沢国語国文』四十三、平成二十六年十月)参照。猶、吉原氏稿に「明德本銘尽」として簡単な紹介がある。
- (7) 和銅博物館蔵。鈴木彰氏前掲著第三部第一編第四章「伊勢貞親本『銘尽』の構成と伝来」参照。
- (8) 同じ宇都宮系本の本阿本(刀剣博物館蔵)と主要な異同を対照する。
- (9) 呆犬斎文庫蔵『古刀鍛冶系図』一冊が、元龜本と同じ「鍛冶目録旧記分」を持つ(錯簡あり)。同本の奥書を挙げる。「本書ハ北原蔵人秘蔵ナル書キモノ、原書ノ仮写シタルモノナリ、文字誤リモ多有ルヤニ思ハル、見ル人熟考スベシ
明治廿七年三月写之、陰曆二月初旬」
- とある。本文の起算年としては「慶長八年」が見える。本書の出所からして、北原蔵人は幕末の津軽藩用人人と思はれる(『青森県史 第三卷』元治元年十月三日条)。以下、明治三十三年本とする。また『和朝古今鍛冶之次第同名乗事』(国会図書館蔵)の「鍛冶旧記目録」は鍛冶の配列が同じだが、名剣説話部分が無い(電子公開)。
- (10) 小峯和明氏「中世の注釈を読む……読みの迷路」(三谷邦明・小峯和明氏編『中世の知と学』(注釈を読む)(平

成九年十二月)所収)に紹介される。此処では吉原弘道氏撮影資料を恩借した。

- (11) 構成は二部(A・B)に分かれる。章題を挙げると、A1「後鳥羽院番鍛冶」、2「大宝年中鍛冶ノカチ」、3「和銅年中」、4「一条院御字」、5「時代無分明」、6「大和国代付」、7「備前物代付」、8「宗近・延利・正恒」、9「粟田口」、10「来」、11「鎌倉」、12「備前」、13「豊後物代付」、14「伯耆物」、15「薩摩物」、16「京物代付」、17「鎌倉物代付」、B18「(茎図)」、19「コミノシサイ」、20「国行・定利銘字相似の子細」、21「鎌倉ノ系図」、22「越中物ノ系図」、23「来ノ系図」、24「(有風・方土)」。17の最後に、

名越遠江入道在判

正和三年二月八日

宇都宮三河入道在判

の本奥書がある。

- (12) 三部(A・C・D)に分かれる。Aは甲本に同。Cは18「所々時代不同」、19「可然物」、20「新作物」、21「粟田口系図」、22「来」、23「備前長船一流」、24「長谷部」、25「越中国住」、26「平安城」、27「越後国(諸国夾雜する)」、28「相模国」、29「大和国」、30「出雲国」、31「丹後国」、32「因幡」、33「肥前国」、34「豊後国」、35「薩摩国」、36「豊前国」、37「駿河二目貫」、38「筑前国」、39「備中国」、40「播磨国」、41「備前国」、42「スリ一文字」、43「大一文字」、44「了戒也」、45「助真」、46「鍛冶銘」、D47「粟田口系図」、48「一文字類銘大方」、49「鎌倉物系図」、50「備前物系図」、51「鎌倉系図」、52「諸国堂銘」、53「正宗(見様)」、54「貞宗(見様)」、55「義弘(見様)」、56「左(見様)」、57「助宗(見様)」、58「刃上中下見様」
- (13) E1「(茎図)」、A2「粟田口系図」、3「来系図」、4「鎌倉系図」(以上が甲本Aの9〜11に近似)、5「鎌倉ノ系図」、6「越中物之系図」、7「来之系図」(以上が甲本Bの21〜23に近似)、F8「神武天皇」、9「鍛冶銘尽」(内題か。上代鍛冶を挙げる)、10「大和国」、11「備前国鍛冶」、12「備前鍛冶京図」、13「備中国鍛冶」、14「備中国鍛冶京図」、15「筑紫鍛冶」、16「(有風・方土)」(16は甲本Bの24に近似)、A17「後鳥羽院番鍛冶」、18「大宝年中之鍛冶也」、19「和銅年中」、20「一条院御字」、21「時代無分明」、22「大和国代付」、29「備前物(延利・正恒を含む)」、30「粟田口」、31「来」、32「鎌倉」、33「備前」、34「(伯耆国大原真守)」、35「豊後」、36「薩摩」、37「伯耆物」、38「(京物)」(以上、甲本A1〜16に同じ)、39「跋」、40「(茎図)」

- (14) 1丁「文武天皇之御宇」、2乙「此天国ヨリ太刀刀トナリヲ作也、前ハ釵ナリ、今モ鋒ハ鑓也」(甲はほ同)、丁「此天王ヨリ太刀ト成^ラ作、前ハ釵也、今モホコハ鑓也」、3甲乙丁「人」、4甲乙なし、5甲乙丁なし、6丁「天王」、7甲乙丁「也」、8甲乙丁「中心」、9甲乙「切タル如也」・丁「キル如ク也」、10乙「中心ミシカク有也、此太刀小鳥ト名付ル事ハ(桓武天皇に鳥が奉呈の由来。甲乙大略同)」、11丁は文寿記事なし、12甲丁「ヲ作也」、13甲乙丁藤戸記事なし、14甲乙丁「ヲ作也」、15甲乙丁なし、16甲乙丁なし、17甲乙丁「生死」、18甲乙丁「云」、19甲乙丁「釵ヲ」、20甲なし、21甲乙「住人」、22丁「也」、23甲乙丁なし、24甲乙丁「也」、25甲乙丁「卅貫」(丁は「真守」の右に書入)、26甲乙丁「卅貫」(丁は「実次」の右に書入)、27丁「此」、28丁「或忌」、29乙丁「カウ」、30乙「被遣」・丁「被進」(甲虫損)、31甲乙「法花堂」・丁「尤重」、32甲乙「ヲカル」、丁「置ル」、33乙丁「ノ」(甲虫損)、34甲乙「サル」、丁「ス」、35甲乙「此太刀ノソリ昔^{ヨリ}昔^{ヨリ}」、36甲「彼太刀ノ作」(乙丁同)、37甲乙なし

- (15) 龍造寺本にも「ちまのとうけんし、ミくりの とうけしのためう」とあり、呆犬齋本・直江本に一致する。

- (16) 直江本「奥州」に「安寿 平泉住 唐人也、源氏之文寿重代ヒケキ[□]又ヒサ丸ト云モ同作也」、佐々木本五「陸奥国鍛冶事」(刀剣博物館蔵)は、

^{實徳開作}文寿^{實徳開作} 文武天王御宇、或源氏重代髮切作者云事在之
 文寿 実次若同人歎曰

とする。

- (17) 『劍卷』は、屋代本『平家物語』付録(貴重古典籍叢刊)による。田中本は高橋貞二氏「田中本平家劍卷」(『国語国文』三十六ノ七、昭和四十二年七月)、長禄本は『日本の古典 平家物語(四)』を参照。

- (18) 能阿系本は刀剣博物館蔵宮元盛本、延徳二年本(『印度本節用集 古本四種研究並びに総合索引 影印篇』所収の永禄十一年本節用集附載)・内閣文庫蔵三好下野守本・天理大学図書館蔵保井本(紙焼写真)を参照。

- (19) 本間薫山氏「古伝書釈文」(『刀剣美術』一六四、昭和四十五年九月)

- (20) 本間薫山氏「古伝書釈文 喜阿本銘尽(抜粹)(八)」(『刀剣美術』一三〇、昭和五十二年一月)・同(九)・同(二)・同(三)・同年二月)。翻刻の方針は明確でない。

- (21) 本阿本「来系図」は少なからぬ異同があるが、国吉・国行に限ると、1「先祖鍛冶目高麗」、2「友切」、3「鉋」とある。

- (22) 梵舜本・天正本・古活字本『太平記』では「三尺三寸」と一致するが(梵舜本は古典文庫、天正本は紙焼写真、古活

字本は日本古典文学大系)、その他の諸本で、寸法が異なる。また龍造寺本に「国行 かなな丸 うつつかり」とある。

(23) 「古伝書釈文 長享銘尺抄(七)」(『刀剣美術』二六八、昭和五十四年五月)

(24) ⑮「備前備中鍛冶」は呆・観両本はほぼ同じだが、末尾に至ると、

(観智院本)

弘次 守重 元家 景光 則光 行実

(呆犬齋本)

弘次 守重 元家 元重 景光 宝寿 則光

行実 サネ 雲上 雲次 劔也

と、呆犬齋本に刀工の増加がある。これも後補の可能性がある。

(25) 東京都立中央図書館加賀文庫蔵近世写本一冊。吉原氏稿「喜阿本銘尽」参照。

(26) 「古伝書 釈文 観智院本銘尽(二)」(『刀剣美術』二三八、昭和五十一年十一月)

(27) 室町物語の『鴉鷺合戦物語』上、第七にも吉家作とするが、同じ「鴉丸」が見える(『室町時代物語大成 二』所収、文禄本による)。

(28) 本阿本「一条院御字」の同人項では、二重線「やきはすくにほそし」とある。

(29) 宮崎本は、**二**に「三峯もあり、丸峯もあり」が入り、喜阿弥系本の古態を残す(吉原氏稿「喜阿本銘尽」)。芳運

本は、
行重 も舞草、大刀、中心土目。末細ク
ウスキ也 三峰ニツクル

とあり、c 相当本文が異なり、g がない(和銅博物館蔵)。

(30) **二**は銘の字の摸写か。

(31) 間宮光治氏「宇治河の先陣と綱切の太刀―刀剣古伝書にみる正恒―」(『刀剣美術』四七一、平成八年四月)